

公開講演会記録

私が見た中国の30年

—1992年から2022年

日本語教師 山崎由美子

私のプロフィール&吉林大学留
学の経緯

私は昭和37年に宮城県仙台市で生まれた。父は自衛隊員だった。静岡県出身の父が仙台の苦竹駐屯地に配属されていた時、母とお見合い結婚をしたそうだ。

私が2歳になった頃、父が突然、静岡に帰ると言い出し、一家は静岡に引越した。5歳違いの弟も生まれ、父は福利厚生が整った企業に勤務し、普通の暮らしを送っていた。あまりお酒を

飲む父ではなかったのだが、「肝硬変」の病に倒れ、あっけなく38歳で、旅立ってしまった。今の医学技術だったら助かっていた病だろう。その後、母の実家のある仙台に私たちは引っ越した。

私は小学校3年生の2学期から、仙台市の郊外にある小学校に転校した。母方の祖父母の家から学校に通った。田舎の学校で、授業内容が静岡県よりだいぶ遅れていた。仙台へ引っ越す前までの私は、引っ込み思案で、とても人前では話すこともできないような内気な女の子だった。それが一転して静岡から転校してきた私は、成績もよく、

活発な女の子になったのだ。私にとつての大きな人生の転機になった。体格が良い、積極的な女の子で、とにかく目立った学校生活を送った。

仙台の田舎で育ち、成長するにつれ、私は親友の影響もあり海外に目を向けるようになった。高校卒業後はCA（キャンピニアテンダント）になりたいたと夢を抱くようになった。目標をもつたことは、たとえ、叶わなくても幸せなことだった。私は年齢制限まで、JALのCAの試験を毎年受けた。

結局、私はCAに合格できなくて、さて、これからどうしようかと悩んで



いたとき、ツアーコンダクター（ツアーコン）という仕事があることを知った。東北6県のお客様の団体ツアーの添乗をした。素晴らしいお客様たちに恵まれ、この職業は私の天職となった。会社の上司に入社4か月で日本全国に行けるよと言われて、半信半疑だったが、本当に全国制覇した。北は利尻・礼文島、南は石垣島まで。その後、海外添乗もこなすようになった。

私が初めて中国の土を踏んだ

私が海外添乗で、初めて中国を訪れたのは1992年8月、某病院の慰安旅行、北京ツアーだった。では、ここから本題の私が見た中国30年の始まりだ。

89年の天安門事件には全く興味がなかった私だ。当時はもちろん、まだツアーコンの仕事に就いてはいなかった。それ以前の中国残留孤児の肉親捜しのニュースも全く他人事で、ニュースを見て、日本人なのに日本人に見えないなあという印象があった。その数年後、まさか自分自身も日本人に見えないと言われる

日が来るとは想像すらしていなかった。

初めて訪れた中国の印象はとても強烈だった。92年の北京空港。あの独特な空港の匂いは一生忘れないだろう。匂いの記憶は深いと言われているが、本当にその通りだ。北京の空港から市内に向かうまっすぐな道。両側にニセアカシアの並木道。ガイドさんが槐（えんじゅ）の木だと教えてくれた。中国のガイドさんは、当時スルーガイドといって中国入国から出国まで添乗してくれる人と、地元ローカルガイドがいた。90年代初頭の中国ツアーの料金は全然安くなかった。それは、外国人は飛行機、列車のチケット代、観光施設の入場料、食事代すべて外国人価格だったからだ。外国人は兌換券にしか両替できなかった。外国人と中国人は乗り物の座席も食事場所も施設の入口もすべて分かれていた。あるとき、北京のとあるレストランでドイツ人のツアー客と同席した。そのドイツ人のツアー客の誰かが誕生日だったみたいで、私たちが日本人だとわかると、日本語で誕生日の歌（ハッピーバースデー）

を歌ってくれないかと頼まれた。日本人は英語で歌うと伝えたら、とてもがっかりしていた。92年当時は、故宮、万里の長城、明の十三陵など観光地はどこも外国人しかいなかった。初めて見た長安街の道路の道幅には本当に驚いた。こんな広い道があるのかと。それと自転車の数。北京でさえも自家用車は少なく、まだまだ自転車社会で車の渋滞なんてほとんどなかった。

中国はすべてにおいて、日本とはスタイルが違っていた。故宮はラストエンペラーの映画の世界そのものだった。私は80年代に西太后の映画も見た。ちなみに中国人には西太后や楊貴妃は通じない。西太后は「慈禧太后」、楊貴妃は「楊玉環」と言わなければならぬ。

ところで、私のツアーコン時代のエピソードはたくさんあるが、代表的なものを紹介してみよう。92年8月夏の北京ツアーでの話だが、明の十三陵で、お客さんたちは見学も終え、暑さで疲れ気味だった。周りの中国人たちは、美味しそうにアイスクャンディーを食

べている。それを見た私のお客さんも食べたいと言いつ出した。ガイドさんに買ってもらうことにした。ところがガイドさんは、あんな安いアイスキャンディーを買ってくれないのだ。なぜかというと、日本人が食べたなら、必ずお腹を壊すからとのこと。菌は熱処理なら死滅するが、低温だと菌は死なない。それで、日本人は冷たいアイスキャンディーを口にすることはできなかった。大変な国なんだなあと実感した出来事だった。他にも、日本人の冷えたビール好きにも悩まされた。とにかく中国は、電力不足だし、そもそも冷たいビールを飲む習慣がないせいで、冷えたビールはほとんどのレストランで提供してもらえないことが多かった。ずいぶん、お客さんからお叱りを受けたものだった。そんな中国の添乗の仕事だったが、悠久の中国に触れることができた私は、すっかり中国にハマってしまった。会社のスタッフにできるだけ中国ツアーをくださいとお願ひした。私のような社員は珍しく、台湾、香港、マカオ、中国大陸の本当にたくさんのお仕事を

らうことができた。90年代初頭の日本は、中国ブームがあった。地方からのチャーター便もよく出発した。ある年、岩手県の花巻空港から上海までのチャーター便の仕事があった。仙台の出入国管理局の係官が花巻空港まで来て、出国手続きを無事済ませ、待合室で、チャーター便が来るのをいつかいつかと待っていたら、結局中国からのチャーター便は来ることはなかった。理由もわからず、その日は旅行社が花巻温泉を手配して、翌日解散した。仕切り直して改めて、翌月に同じ中国ツアーを催行したということもあった。「トラブル」は「トラブル」だと言われるが、何度もこのようなトラブルを体験した。ちなみにそのチャーター便で無事ツアーを終え、花巻空港に着いて、たまたま飛行機の貨物から掛け軸を降ろすところを目撃した。100人弱のツアー客に対して彼らが購入した掛け軸は200本以上あった。日本人は、中国で掛け軸を買うのが大好きだった。いつの日か日本人がこぞって、中国旅行する時代がまた来ることを願ってやま

ない。

中国を何度も添乗で訪れているうちに、どうしても中国語を学びたくなつた。仙台市の日中友好協会が開催している中国語講座などでも中国語を学んだが、これはもう中国に留学するしかないと決意して、1995年秋、仙台市と友好都市である吉林省長春市にある吉林大学に晴れて留学した。国際交流学院第1期生となった。



吉林大学国際交流学院入学式

私には北京の国際旅行社の日本語ガイドで沙銘という知り合いがいた。彼女は長春出身で、父親が病気になり、看病のために長春に来ていた。たまたま、私が住んでいる大学の寮と沙銘の実家が近かったので、お宅によくお邪魔した。沙銘のお父さんと交流する中で、ある日「山崎、人参は要らないか」と聞かれ、もちろん聞き取れなかった。漢字で書いてもらったら「人参」と書いてある。なんで、私に人参が要らないかと聞くのか不思議でたまらなかった。あとでわかったが、「高麗人参」のことだったのだ。「高麗人参」は中国の東北三宝の一つである。他にも「鹿の角」「林蛙」が現代の三宝だ。昔は貂の毛皮、烏拉草といわれていたようだ。大学が冬休みに入ったころ、私は、南のほうへ旅行に出かけた。北京、洛陽、開封、鄭州、武漢などを訪れた。当時の中国の一人旅は、困難を極めた。中国語もままならない私は、中国の友人たちの協力によって、友人の友人、そのまた友人というふうに初めて会う人々に助けてもらいながらの

旅だった。こういうときの中国人は本当に頼りになる。南に移動した私は、暖かいと勝手に想像していたが、鄭州などでは、夜は寒くてオーバーを着て寝た。無事に旅を終え、武漢から長春に戻った。長春に到着したのは夜だった。無事に寮にたどり着き、部屋のドアを開けて、スチームで暖かかった部屋のありがたさは一生忘れない。中国の東北地方のスチーム暖房は素晴らしいと再確認した。

さて、長春に戻った私は沙銘のお父さんの死の知らせを受けた。亡くなる3日前ぐらいに沙銘のお父さんは「山崎は、いつ長春に戻ってくるんだ？」と私のことを心配していたそうだ。そして、その沙銘の父親のお葬式で、沙銘から「私の従兄のお兄さんは警察官だから、いろいろ頼りになると思うから山崎さんに紹介してあげる」と言われた。その紹介されたのが、後に結婚する沙飛だった。彼は警察官で、日本語は話せなかった。私も中国語のレベルはまだまだ低かった。私たちは筆談で交流した。これは、本当の話なのだ

が、彼からあなたはどんな仕事が好きなのかと聞かれ、私は紙に「接客業」と書いた。これも後でわかったのだが、中国語の接客業はホステスさんのような水商売の仕事のことだそう。そういわれてみれば、そのときの彼は怪訝そうな顔つきをしていた。その後、デートを重ね、彼の家族にも紹介され、1996年6月23日、結婚式を長春市の「華僑賓館」で挙行了。結婚の決めた手になったのは、なんととっても夫の母と私の母の境遇がほぼ同じで、夫も長男、私も長女で一番上同士だったことだ。この人だったら、いろいろ価値観が合うと思った。母同士が同じ境遇という意味は、私たちの母は夫を早く亡くし、再婚した2番目の夫も早く亡くした。私の母は私の国際結婚には全く反対しなかった。私が吉林大学に留学した時点で、覚悟していたようだ。薄幸の2人の母はもういないが、私と夫は、最後まで母親たちの面倒を見ることができた。

ちょっとここで、中国語の難しさに触れてみたいと思う。夫と私のキュー

ピッドだった沙銘だが、親戚に「沙敏」という人もいて、これを聞き分けるのが難しい。他にも夫の弟の嫁が「単軍」と言い、やはり親戚に「沙軍」がいる。本当に日本人には難しい発音だ。特に名前は難しい。今は携帯電話だからいいが、以前の固定電話のとき、中国人は名前を名乗らない習慣がある。私が「どちら様ですか」と聞くまでいいのだが、相手の名前は聞き取れないのがほとんどだ。そして、「我是你大哥（私はあなたのお兄さんだ）」と言われるのも困った。どのお兄さんなのかわからない。友人でも兄と言う習慣がある。

20年間、長春市で日本語学校を 経営

では、ここから、日本語学校設立の話になる。長春市で日本語学校を設立するのは、比較的簡単だった。サポートしてくださる方もいたし、夫の人脈もあった。準備期間は半年ほどで、2003年3月8日、日本語学校をつい

に開校した。学校の場所もとても重要だった。長春市の中心、人民広場に決めた。ここには「工人文化宮」という施設があった。このこと提携して教室を提供してもらった。後に学校名を考えるとき、中国では人名は付けられないと聞いていたのだが、ダメもとで、私の名前を使った「山崎外語培训学校」で申請したら、許可がおりた。日本語学校にしなかったのは、将来、他の言語も教えようと思ったからだ。

世相と学校の歩み

2003年3月8日、長春市の中心、人民広場にある工人文化宮に日本語学校を開校。

4月24日～6月30日、SARSのため学校を休校にしなければならなかった。6月、福岡一家4人殺人事件が起こり、日本留学が困難になった。

2005年、小泉首相（当時）の靖国参拜で日中友好が険悪ムードに。

2006年、温家宝首相（当時）の日本訪問を機に日本語ブームが到来。学生が急激に増加。

2010年、尖閣諸島問題が勃発。

2011年、東日本大震災。

2012年、反日デモ。

2020年、コロナ禍

2021年4月、学校の法人である夫が死去。

2022年10月、学校の譲渡手続きを終えて、日本に完全帰国。

学校を経営して苦労したこと

・教室の賃貸契約があり、前家賃も払っていたが突然解約される

20年間、学校経営をしていて、3回引っ越しをした。賃貸契約があっても、突然解約されることが2回もあった。あまりにも理不尽だが、珍しいことではないと思う。

・チャイナリスクで突然、休校の通知が来る

一度、SARSでも経験していたが、突然、明日から休校にするように言われる。今回のコロナは本当に大変だった。一度、学校が再開できる通知があったときも、5つの部門に届け出が必要で、この難関を突破するのは大変だった。コロナが始まって、ほぼ3年は休校状態。我が校だけではないので、そ

れは仕方がないことでもあるが。
 ・年1回の学校経営の検査手続きが煩雑、毎年変わる

我が校は正規の学校だから、毎年4月に学校の検査書類を提出しなければならなかった。その手続きが毎年、変更があり煩雑で、夫がいつも文句をいながら、書類を作成していた。現在、私は日本で某日本語学校の事務の仕事に携わっているが、日本語学校が日本の入管に提出する書類も大変だ。

まだまだ、紹介したいことは山ほどあるが、愚痴になってしまふ。ネガティブなエピソードはこれくらいにしておく。

学校を経営して良かったこと

・20年間、たくさんの生徒が日本語を勉強に来た

民間の学歴に関係のない学校だったから、生徒がたくさん来てくれた。少なく見積もっても延べ1万5千人、2万人は入学してくれたと思う。出国する人のための全日のクラス、夜のクラス、土日のクラス、会話のクラス、そして、小学生の授業などいろいろ、生

徒のニーズに合わせた授業を開講した。日本人と結婚する人のクラスが自然に発生したこともあった。

私自身、いろいろな場所で日本語の授業をやった。中学校、高校、大学、長春にある日系企業、IT企業の研修などなど、お陰で、豊富な日本語教育の経験を積むことができた。

・コロナ禍前までは、毎週土曜日、長春市民に無料で会話練習の場所を提供した（日本語コーナー／中国語コーナー）

私はライフワークとして、日本語学校を開校する前から、長春市の書店の一角をお借りして、日本語コーナーを開催してきた。学校の宣伝も兼ねていたし、書店の店長さんも喜んで場所を提供してくれた。学校が軌道に乗ってからも今度は我が校でずっと、毎週土曜日、日本語コーナーを開催してきた。

長春にいる日本人留学生や、教師の方たちに参加してもらった。内容は、コロナ禍の前までは、「私のふるさと自慢」ということで、日本人に自分の故郷を紹介してもらった。47都道府県を制覇する意気込みだったのだが、8都



日本語コーナー

道府県で、あえなく終了してしまった。コロナさえなかったら、今も続けていたはずだ。本当に残念だ。

・教師になりたいという夢が叶った

実は、私は小学校の卒業文集では、将来、教師になりたいという夢を書いた。中学校のときにいろいろ影響で外国に憧れるようになり、CAを目指すことになった。CAになる夢は破れ

たが、元々は、海外に憧れていたもので、ツアーコンダクターとして、仕事で国内外、いろいろな観光地に行けたのは、ラッキーだった。家族からも天職と言われた。でもツアーコンよりもっと天職で、元々の夢だったのが教師だった。それも自分で学校を経営するなんて、本当に夢のようだった。辛いことも多

かったが、中国が大好きだったので、素晴らしい人生を送ることができたと自負している。中国人にたくさん、助けられたので、今度は日本で、恩送りするつもりだ。残りの人生、日中友好に少しでも貢献できたらと思っている。

・たくさんの出会いがあったー「桃李満天下（至るところに教え子がいる）」偶然に入った中華料理屋に私の生徒がいた

現在、私は東京都内に住んでいるが、日本に戻ってすぐ、たまたま京成高砂駅の駅前にある中華料理屋に入った。そこは中国人が経営している店だ。店員さんも中国人だったので、出身地を聞いたら、长春市と言うではないか。山崎日本語学校を知っているか聞いた

ら、なんと我が校で日本語を勉強したと言ったので驚いた。こんな出会いがまた東京か日本のどこかであると思う。世間は広いようでとても狭い。

私の中国人の印象

私は30年間、中国人と付き合ってみているいろいろ感じたことがある。一括りに「中国人は○○○」だとステレオタイプでの考え方はだめなのは百も承知だ。ただ、あくまでも個人的な意見だが、中国人の欠点は共通項があるような気がする。日本人の欠点も同じだが。たとえば

- ① 口答えがすごい。必ず言い訳を言う。
- ② 備品の補充ができない。
- ③ メンツが何よりも大事。「好面子」。
- ④ 自分の仕事以外はしない。よけいなことはしない（日本人もそうだが）。
- ⑤ 凭什麼？（日本語訳：なんで、あなたの言うことを聞かなければならないの？）。
- ⑥ 授業で名指しした人の周りの人が答える。

⑦ 前もってがない。「報連相」がない。文化的な面では

- ① プレゼント文化：必ず2個（対で）大きい物、高価な物をプレゼントする。あげた物を職場に置いたままにする。時計はあげてはいけない。出産祝いに哺乳瓶はあげてはいけない。
 - ② 梨を切ってはだめ。
 - ③ 料理は残すこと。ビールが来てもすぐに飲んではいけない。2〜3品の料理が来てから。
 - ④ ゼスチャーの違い。月／日が反対。テストの☑は正解の意味。
 - ⑤ 苗字と名前の間は空けない。白い紙に黒い字を書かない。
 - ⑥ お葬式（火葬）が過ぎたら、お香典はあげない。お葬式に来ない。
- 帰国後、戸惑うこと
- ① バスを降りるとき、早く出口に移動して、運転手さんに叱られる。
 - ② 背が高いと言われる。長春では背の高い女性が多い。
 - ③ ゴミの捨て方が慣れない。
 - ④ 蕎麦をすすする音にびっくり。
 - ⑤ クリーニング代が高すぎる。

中国のゼロコロナを経験して

最後に私が体験したゼロコロナを時系列でまとめてみた。私は2019年12月末に、年末年始を当時日本の大学に通っていた息子と一緒に過ごそうと一時帰国していた。

2020年1月26日 一時帰国から長春に戻った。このとき、まさか中国がマスク不足になるとは予想もしていなかった。

2020年2月 外国人のコロナへの取り組み方ということで複数のメディア(新華社他)から取材があった。

2020年夏 スマホの健康コードアプリが必要になった。身分証番号がない外国人はスマホの健康コードが登録できず、特別な外国人専用の健康コードを使用。最終的に外国人がパスワード番号でスマホに登録できるようになったのは、2022年4月末からだった。2020年12月〜2021年2月 夫と仙台の東北大学病院に病気治療のため来日。中国に戻ったとき、2週間の

隔離(瀋陽で)。高铁で長春に移動(自家用車は不許可)。その後、1週間は長春のホテルで、最後に自宅で1週間、隔離生活。一步も外に出ることは禁止。

2021年6月 外国人だけが集められて、有料でワクチン接種。1回につき100元×2回。

2022年3月11日〜4月28日 長春がロックダウン。私は延吉に滞在していた。延吉のロックダウンは3月13日〜3月31日。長春市でロックダウンされていたら、私はどう生活していたか想像できない。食料の調達など、外国人の私には無理だった。親戚や友人たちもサポートできない状況だったそうだ。私は運よく延吉で、ビジネスホテ



外国人居住者の新型コロナワクチン接種風景

ルでの生活だった。3食付き、生活用品も何の不自由もなく生活できた。部屋のゴミを捨てながら外の空気を吸って、ホテルの周りを散歩していると、さすがに部屋に戻りなさいと見回りの人から叱られたりした。ホテルの部屋から延迎大学の学生寮が丸見えで、大学のキャンパスの様子がうかがえた。大学生は門から一步も出ることはできなかった。毎朝、棟ごとに列をなして、PCR検査に行っていた。

2022年6月2日〜 延吉から長春に戻ったとき、自宅で1週間隔離。3日に1回だったPCR検査が毎日検査になったり、また3日に1回に戻ったり、目まぐるしくPCR検査のスケジュール変更があった。PCR検査場が至る所にあった。無料で簡単にできるのだが、限られた時間内で、行列に並ぶ必要があった。

2022年9月 瀋陽に仕事で1か月滞在。健康コードの他に場所コードも必要。交通機関利用時や大きな施設に入るにも場所コードが必要。長春に戻って、また1週間の自宅隔離をしなければ

ばならなかった。

2022年10月 長春―大連間を高铁で移動。大連から成田に無事に帰国できるかとても不安だった。日本帰国前のPCR検査の書類をそろえるのが大変で、中国の友人に病院まで付き添ってもらった。本当に友人たちのサポートがなかったら、日本に帰国することもままならなかった。コロナ前は長春

空港から成田までの直行便が週4便あった。それがずっと欠航になってしまった。2023年4月1日から週1便がやっと運行を再開したようだ。昨年、私が長春から大連まで高铁で移動する2〜3日前から、自宅近くで感染者が出たという情報が入った。大連から無事に日本に帰国できるか、不安で仕方がなかった。大連には亡き夫の甥っ子がいる。大連駅を出たら、甥っ子が私を出迎えてくれた。大連駅近くのホテルに宿泊。翌日、大連の空港まで甥っ子が自家用車で送ってくれて、無事帰国できた。成田空港に着けば、今度は息子が迎えに来てくれているはずなので、息子と再会したら、号泣するに違

いない。周りに人がいて恥ずかしいけれど、感情は我慢できないだろうと覚悟していた。成田空港の到着ロビーに出て、息子を探したら見つからない。すぐに息子の携帯に連絡したら、出口を間違えたらしく、しばらく待たされた。おかげで、号泣せずにすんだ。

これからも中国と関わり続ける

繰り返しになるが、私が初めて中国を訪問したのは、1992年の夏。あっという間に30年が過ぎ去った。30年前の日本と中国は、今とは比べることができないくらい経済力の差があった。

この30年の中国の発展は、目を見張るものがある。ちょうど中国が発展するプロセスを私は目の当たりにすることができた。私は、人生は「縁と運」が大きく影響すると信じている。私は日本から「近くて遠い国」である中国と縁があったのだ。私は中国を愛してやまない。中国が大好きだ。これからも中国との縁を大事に、日中友好に少しでもお役に立てればと思う。

(2023年5月11日・公開講演会)

筆者略歴(やまざき・ゆみこ)

仙台市で生まれた。

1995年9月、吉林大学に留学。

2003年3月、長春市山崎外語培訓学校を開校。

2022年10月、日本に完全帰国。

【中国から授与された賞】

吉林省長白山友誼賞、吉林省優秀外国専門家賞、吉林省優秀外国籍教師賞、長春市友誼賞、長春市突出貢獻専門家賞、長春市優秀外国専門家賞、長春市優秀外国籍教師賞。